

初洋行から十年 いまだ翻訳学習中



東江一紀

いやあ、つらいっす、年末進行。
なんで、毎年、毎年、律義に年末が来るんでしようね。

雑誌はまあ、しかたないとしても、書籍のほうでも、年末は印刷所の機械を確保するのがたいへんらしくて、遅れ遅れのわたしの翻訳原稿のために、必死で印刷機を一台押えた

某社の編集者が、毎日のように原稿を取り立てに来るんですよ。

もとはといえば、ここまで遅らせたわたしが悪いのだが、缶詰め状態が続くと、酸欠の脳みそがしょっちゅうエンストを起こして、仕事がぜんぜんはかどらず、遅滞の度はいや増すばかり。

瓶詰めは得意なんだけど、缶詰めはどうも、って、わけのわからんこと言ってる場合じゃないのよね。

二時間ほど前に、バイク便が来て、一日分の原稿を収めたフロップイーを持っていった。それで、さっき、編集者から受け取った旨の電話があったのだが、「いただいたテキスト・ファイル、当社の高速プリンターに出力したら、一秒で印刷できました」って、いやみを言いやがんの。

わたしの原稿をプリントアウトするのに、高速プリンターを使うなんて、猫に大判焼きというもんですよ。わが家の低速プリンターだったら、二分半はもつぞ。

いえ、いえ、やっぱりわたしが悪いんです。年々仕事が遅くなって、遅いもんだから休めなくて、休めないもんだから能率が落ちて、という悪代官。あ、違う、違う、悪循環。

このところ、訳書が出るたびに、あとがきで「遅延のお詫び」をしているような気がします。ほんと、申し訳ない。

と、平身低頭したところで、まあ、まさか待ってた人はいないと思うんだけど、前号の続きです。梶光夫の次は、久保浩。じゃなくて、十年前の初洋行のお話。

フランクフルトからニューヨーク、シカゴ、ダラスと回って、とりあえず地球を一周する

つもりだったわたしは、しかし、フランクフルトから先の航空券を持っていなかった。

現地で購入したほうが安い、と聞いてたもんですからね。ところが、現地へ行ってみると、その安い現地というのがどこにあるんだかさっぱりわからない。

困り果てて、結局、フランクフルト中央駅にあるルフトハンザに行きました。

もちろん、ドイツ語なんて、エスプレッソとスパゲッティしか知らないわたしだから、英語でしゃべるしかない。ちゃあんと英会話基本文例集で予習しましたよ。

「ワタシ、航空機トイウ手段ニヨツテ、ニューヨーク行キタイアルネ」

とまあ、そんなふうな英語で、カウンターの金髪碧眼氏に語りかけた。向こうは座って、こっちは立ってる。

「ソレデ？」

と、きき返された時点で、せっかくの予習が無に帰した。台本にない台詞を言うなよ。

しょうがないから、丸暗記した最初のフレーズをくり返す。もしかすると、「ニューヨーク」に不定冠詞の「ア」をくっつけていたかもしれないが……。

「ソレデ？」

おい、おい、澄んだ瞳をした、いたいけな東洋青年（なにせ、十年前ですから）をから

かうなよ。と、胸のなかで抗議しつつ、ほかに策がないので、もういっぺんくり返すと、

「ソレデ、ソノ航空券ヲバ、オマエハココデ買イタイノカ？」

この野郎、買うためにここに来たんじゃないか、と、どなりたいのは山々なれど、それを英訳する力はとてもなく、「ソノトオリデゴゼエマス」と答えてしまった。

「ダツタラ、ソノ椅子ニ座リタマエ」

おお、「ニューヨークに行きたい」ぐらいじや言葉が足りなくて、「ニューヨーク行きの航空券を、どうぞわたくしめに売ってください」と言わなきゃならなかったのね。考えてみれば、非常に論理的な対応だ。

ようやく座るところまでこぎ着けたわたし、あとはもう、「ノーと言えないニッポン」を代表して、差し出される料金表やカレンダーや時刻表を指差し（↑情けない）、ほとんど手話で、どうにかこうにか航空券を手に入れたのだった。

でも、フランクフルト最終日には、優しい金髪碧眼氏にも出会えたぞ。宿を出て、空港までタクシーに乗るつもりで、スーツケースを手を歩いていたら、フォルクスワーゲン・ゴルフがすぐ横に停まって、若い男が「エアポート？」ときくんです。

わたし、「イエス！」と、いちばん自信のあ

る英単語で答えました。

「ジャ、乗ンナサイ」

あらら、どうすりゃいいんでしょう。非常に不安だったけど、ここはやっぱり、「ノーと言えないニッポン」を代表して（こればかり）、乗せていただきましたです。

これが気さくなアメリカ人だね。いろいろ質問してくるんですが、こちらの耳と口が追いつかないのを、いやな顔もせず、粘り強くフォローしてくれる。

そして、なんと、「アナタノ英語、ジョーズデスネ」などと言うんです。

おたおたしちまいましたよ。「イエス」と言っても「ノー」と言っても、変だしねえ。そのすきを突くように、向こうは、「ナンノ仕事、シテマスカ？」ときいてくる。

答えにくいよなあ。

「ホ、ホ、翻訳ヲ、チョコット……」

顔からファイアが出るように、恥ずかしい思いをいたしましたです。

でも、向こうはよくわからなかったようだ（無理もないけど）。首をかしげたあとで、「ハア、学生サンデスネ」と言うの。翻訳が職業として成立するなんて、西洋人には理解しにくいんでしょう。

以来十年、わたし、いまだ翻訳学習中の身であります。